

# 蝶々原林道 霧景色

諷字魔 眞清矢

峠に魅せられてから、行きもしないのに峠の紀行文だけはよく読む。そもそも峠を越えるということは、何か安心感というか満足感というかが、その頂点に至るまでの苦しみを忘れせしめる程の“やすらぎ”を感じさせるものがある。それは、私一人が抱くことではなく、雑誌の素人エッセイストの心でも感ずるものなのである。そして、峠の馬頭観世音塔、石仏や、峠のかもとの神社などに見られる峠信仰には、旅路に済ませて行った人々の魂を慰める心のおならず、その根底に流れるものは、こういった人間の本能的な感性なのかも知れぬ。ともかく、他人の語る峠談義に、遠くいまだ踏まぬ地へ思いをはせる。

私が蝶々原林道と出会ったのも、実は保福寺峠の名を知ることから始った。保福寺峠は昔、松本から上田へぬける東山道の要衝であったが、今では林道の中継点でしかない。その隣りに三才山峠というのがある。そしてその隣りは武石峠である。ここまで役者がそろくと、次にすることは唯一つ。はやる心を抑えて、書店へ地図を買いに行く。5万圓の「和田」というのを買う。そしてそれから数日というもの5万圓とのにらめ、こに明け暮れる。夜雑に入り組んだ等高線に色をつけたりしてみる。あ、たあ、た、この三つの峠を結ぶ道が。よし。——何がよしだかわからぬが、ともかく目鼻がついたような気がしたのだ。た。

安楽椅子探偵(マーム・チェア・ディテクティブ)という言葉がある。現場の状況を聞いただけで、犯人をぴたりと言い当てるというやつである。さながら、この時の私は、<sup>マーム・チェア</sup>安楽椅子<sup>サイクリスト</sup>自転車乗であった。言葉をかえれば、「書齋派」サイクリストとでも言うべきものであろう。ともかく、冬ということもあって外へ飛び出すこともなく、また、この道の先を何と呼ぶかも知らず、しばらく時が流れてしまう。房総の林道とのうおきやオリエンテーリングの事などがそれに代って私の時間をうめていった。(この浮長に味をしめて、今冬も再び房総へ行くことになりそうで、そういって、たまたまから見ると、けっこう掘り出し物だ。たがも知らぬ。)

しばらくこのことを忘れていた私に再び火をつけ下したのはニューズの'78 4月号であった。薛雅春氏の「風と蝶々原林道」という記事が載った。その写真が良かった。林道は屋根道である。北アの山々が写っている。単純な筆者は両びいてもたってもいらなくなつたのである。しかしその記事は秋のものであったから、私は秋休みに行動を起すことにした。どうしてもあの写真の風景が見たがったのである。

夏休みが終り、慶の前期末試験が終了し、いよいよ秋休みが来た。計画によれば、和田峠からビーナスラインを北上し、尾崎から、「かっぎ」で美しい原へ入り、武石峠から蝶々原林道、保福寺峠をへて上田へぬけるという少々長旅になるはずである。ところが、何故か私の愛車は、10月1日、河口湖周辺に出没していた。

何と、恐怖のT.T.F.S.T.T.に出場する蓋である。

そもそもT.T.の日程を決定するときも、少なからず心配をしたのだが、私個人で動くクラブでもなし、まあいいやと思ったものである。どちらかといえば、順位や勝ち負けのつくことはあまり好きではないので、T.T.そのものに対しても好感を抱いていない。(その点、フランスで有名なグレベヤオダックス等のいわゆるシクロツーリズムには共感を覚えるものが多い。)いざとなれば、せめ木は良い。が逃げたと思わせるのはしゃくである。それに、歳はとれども、けこうせ木せうな長もする。——こ木がこの男の単純、がっ軽薄なところである。一年のころから此べて、ど木だけ体力が落ちているがもわきまえずに、身の程知らずも良い所である。—— ということ、とにかくT.T.に出ることになった。

二日目手前までの、のた明るい長分とはうらばらに、ゴール後の長持は沈みきっていた。又時間半を上まわってしまった。あ——。落ち込んだ。何度もフリーランを断念しようと思ったことが。T.T.前日に御坂峠の人が行くんじゃなかった。ために、オリャー。絶好調だと思ったのになー。あ——あ。一年のときは、又時間9分だったのになー。天気が、ぬけるような快晴であることが、唯一のなぐさめである。疲労の禰が

連泊のYHでは、グっすりと寝ることが出来た。(御坂峠より河口湖富士を望む)

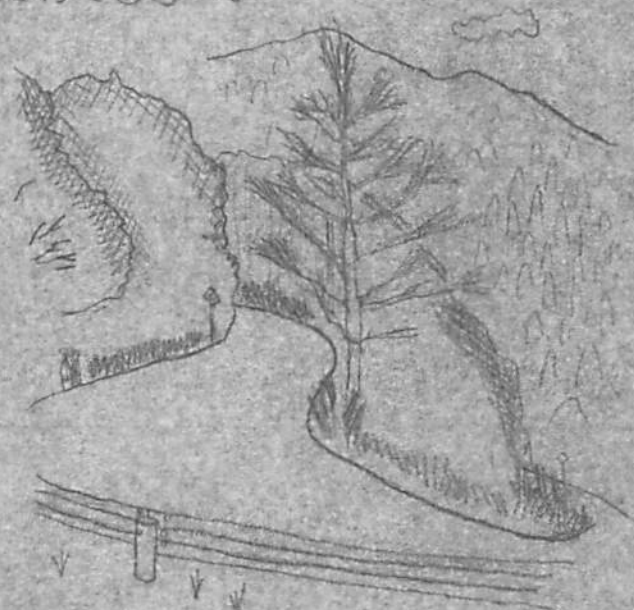




翌日、松本行き「あずさ5号」の車中の人となったのは、やはり長い間育てて来た執筆のたまものであったかも知れない。ときかく、上諏和で輪行を解き、食料若干を調達し、胃袋をふくませ、和田峠へと足を向けた。美しい原へのアプローチとして、峠からの登山道を選んだ私は、和田峠のユースロッジを中継点とし、中山道を諏訪湖からのぼってゆくことにはなる。昔、保福寺峠の果していたような甲州路と上田を結ぶ役割を、現在では、この和田峠とR254の三オムトンネルが担っている。和田峠は生活道路の要所なので、なんでも明日は、新和田トンネルが開通すると開く。旧和田トンネルよりも低い所に広いトンネルが出来ている。旧トンネルのように片側交互通行ではない。

横目でトンネルを見ながら、細い峠への道へ、ハマピンを曲る。そんな脇を大型トラックが轟音を響かせて通り過ぎてゆく。和田峠は生活道路なのである。

その晩、おそくまで、トラックが排気音を残して峠を通り過ぎていった。ユースロッジの部屋の窓にヘッドライトの明りが、いく度となく流木では、消えていった。静寂がそのたびにおとすんだ。



和田峠へのアプローチ

天気がくずれて来るという予報とは裏腹に快晴の翌日、和田峠から扉峠へビーナスラインで軽く足なるしをして、いよいよ乗っていた自転車に乗られる破目となる。小柳氏のリーレポによれば、又時間の行程である。が、しゃせんサイクリストは、ペダルの上に足を置くのが本職で、地面の上へのせるとしたんに力がか切れてしまう。特に階段状の所なくせもので、十段行つては休みをくり返す。しがし又時間という定説をくつ返すことなく、茶臼山山頂に着いた。その展望のすばらしさは、筆舌に及ばぬものである。眼前のハヶ岳連峰、富士山がその横に小さく見え、南アから北アに至る山々、そして背後には美しい原の台地。ふり返つて見わたせば、ざっとこんなものである。かつぎの著しかったことなどは瞬間に吹さ飛んでしまった。

その晩は、美しい原からは、もっとも武石峠に近いと思われる王ヶ山荘に泊った。夕方からガスが出て来て、気温もグングン下がった。明日の天気だけが長くなる。明日はいよいよ蠟ヶ原林道であるからな。

果して、目がさめると、外は……外は……おそるおそるカーテンを開けると、窓が曇つてよく見えないうが、……窓をひく……おれ……窓をひいても白いのである。……ガビーン。外はほんと、ガスっていて、おまけに小雨である。さてこまった。果して行くべきか、行かざるべきか。いやそのことせめて、舗装道をおりるか。しかし、ここでやめると悔いが残るしな——。

とにかく、武石峠まで行って考えても遅くはないやと、小雨の中を一人飛び出した。美しヶ原入口から武石峠までは、舗装の快適な道だから、雨も苦にならない。何やら春合宿の祖谷寮を思い出す天気である。周囲が見えないので、なおさらである。地固によれば、美しヶ原林道を武石峠から入れば、ほとんど下りである。川々心細いが、いっちょ行っただるか。そんな長になり、結局林道を下ることにする。とにかく霧で何も見えぬ。尾根道だから、相鳴の展望が入られるはずであるがとにかく一面真っ白けである。烏帽子岩という奇岩も霧の中で、道標のみがその存在を教えてくれる。三才山峠は、その近くで下のトンネルの国道を通る車の音でどうやら位置がわかる。用具をまとい、トロトロ下る。なにしろパンクが怖い。私はパンクに関してはかなりの自信がある、たがなにしろこの雨である。夏合宿のときに、支笏湖への下りで、かなり派手な下り方をした時にやらかしたパンクで、かなりF氏あたりからの熱い視線を感じたし、(F氏はその直後に車倒した為か逆に私からの熱いやつを感じたはずである。)、美しヶ原林道でパンクなどというところ、もう全くあまえにはあそこは縁がながったんだみたいな身と言われるのがいやだった。それに、なによりもドロだらけのタイヤをはずすことがいやだった。鋭く尖った石がごろごろしている所などは、ヒヤリとしたものだ。

保福寺峠が見えたときは、少なからず安心した。全くたいた所ではないが、それでも安心した。保福寺峠から大明神岳の船を



すりぬけて、一長に国道がら上田へと下った。保福寺峠を下りほ  
じめると、周囲の色彩がはっきりしだし、雪がらぬけ出したこと  
に気づいた。大明神の円堆形とその線が印象的であった。

上田の喫茶店で僕は外をぼんやりおがめていた。雨はもうあ  
がっていたが、重く鉛色をした空がゆうつそうに広がっている。  
しかし、飽心状態であった私の心の片すみにも、すでにもう一度来  
ようという言葉が生まれつつあった。上野までの急行券を買うこ  
ろには、確固として心の中で広がっているのが、自分でもわからず

それは、いつになるかわからないが、もう一度、再びこの地  
へ足を運ぼう。ほんとうにいつかわからないが、絶対に、――

絶対に。

PS. この旅で、僕はいろいろな人と会い、いろいろな新しい  
発見を頂いているのだけど、(例えば、<sup>アロウ</sup>ヨッパライ とまじ  
で話しをしたことなんかがあるんだけど)でもそういう詳細  
がい事は書いているときがないし、ふたんのサイクリストと  
しての僕の生活の片鱗を盛り込んだエッセイにしたから  
ので、あえて割愛しました。